



Title	建築家の受難：スィニンマール伝説に関する覚書
Author(s)	福田，義昭
Citation	関西アラブ・イスラム研究. 2004, 4, p. 95-115
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105864
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

建築家の受難

—— スイニンマール伝説に関する覚書 ——

福田 義昭*

The Misfortune of an Architect: Some Notes on the Legend of Sinimmār

This paper addresses hitherto unexplored aspects of the ancient Arab legend of Sinimmār and attempts to shed some light upon them. Legend has it that a Greek (Rūmī) architect named Sinimmār, who built a palace for the Lakhmid King, al-Nu‘mān b. Imri’ al-Qays, was cast from the top of the palace and killed by order of the King himself as soon as he accomplished the work.

It seems that René Basset was the first to write monographs on the legend. He published two articles about the subject, one in 1891 and the other in 1906, the latter of which was in fact an expanded edition of the former. Basset showed that the origin of a motif employed in a “romance moresque” of Spain lies in the legend of Sinimmār, while at the same time listing and classifying the variants of the legend, and also drawing attention to the various similar stories in Europe, Russia, and North and West Africa.

Inspired by Basset, J. Halévy in his turn wrote an article on the subject, focusing on the issue of the origin of the legend. He concluded the article with interesting but highly dubious hypotheses which link the origin of the legend to an anecdote mentioned in Macrobius’s *Saturnalia* concerning the introduction of a statue of the Sun God to the ancient Syrian Heliopolis by the then King of Egypt, Senemur.

In this paper, I will not provide an alternative to Halévy’s hypotheses about the sole origin of the legend, but rather deal with the heterogeneous character of the legend, paying attention to its various patterns in more detail. I also give as many similar examples as I know of other parts of the world which were not mentioned by Basset, some of which date back far beyond the legend of Sinimmār. In addition, I give some examples from the modern Arab world, where similar stories, some of which clearly have their roots in the legend of Sinimmār, are told about more recent constructions. Finally, I consider the significance of stories of this kind in more general terms, especially from the viewpoints of the relationship between the architect and Power, and of the “alienness” of the architect.

1. はじめに — 伝説の概要

アラブ世界に「スイニンマールの報酬」(Jazā’ Sinimmār) という有名なことわざがある。人が恩を仇で返されたときに使うもので、イスラム以前に栄えたアラブ王朝の一つ、ラフム朝 (Al-Lakhmiyyūn) を舞台とした古い伝説に由来している。ある建築家が宮殿の建造を王に依頼されるが、傑作を完成させるやいなや、依頼者である王自身によって宮殿の上から突き落とされ、死んでしまうという話である。建築家の名がスイニンマールというのであった。本稿ではこの話をスイニンマール伝説と呼び、その様々な形態や類話等について考察する¹⁾。

* 大阪外国語大学 非常勤講師／国立民族学博物館講師 (研究機関研究員)

1) ただし、手元にある資料の限界や私自身の力量不足から、以下はあくまでも先行研究の整理とそれに対する若干のコメント・付加的な情報にとどまっており、中間報告的性格を免れていな

スィニンマール伝説については古来、あまたの書物が様々な伝え方をしてきた。したがって多くの異型があるが、ここでは、代表的な例を二つ挙げるにとどめたい。重要な点はおおよそ、その中に出てきているからである。まず、アラビア語で書かれた中世最大のことわざ辞典、マイダーニー (d.1124) の『ことわざ集成』を引く。

スィニンマールの報酬：すなわち「私はスィニンマールと同じ報酬を受けた」という意味。スィニンマールはヌウマーン・ブン・イムル・アル=カイス (al-Nu'mān b. Imrī' al-Qays) [「イムル・アル=カイスの息子ヌウマーン」の意] のために、クーフア郊外 (zahr al-Kūfa) にあるハワルナク (al-Khawarnaq) [という名の宮殿] を建てたギリシア人の男 (rajul rūmī) である。建造が終わると、彼はヌウマーンによってハワルナクの上から投げ落とされて死んだ。ヌウマーンがそのようなことをしたのは、スィニンマールがほかの人に同じようなものを建てないようにするためだった。こうして、恩を仇で返された人 (man yujā bi'l-iḥsān al-isā'a) に対し、アラブはスィニンマールのことをことわざにして言うようになった。詩人 (al-shā'ir) は言う。

われらの善き行いに対して、サアド族は
罪なきスィニンマールの受けた報酬を返した

ただし、次のような説もある。彼 [=スィニンマール] はウハイハ・ブン・アル=ジュラフ (Uḥayḥa b. al-Julāḥ) の砦 (uṭum) を建てた人物である。建造が終わると、ウハイハは彼に向かって「しっかりと建ててくれたな (la-qad aḥkamta-hu)」と言った。スィニンマールはこう答えた。「実は、ある石を引っこ抜くと (nuzī'a)、砦全体が完全に崩れ落ちる (taqawwada) ようになっております」。ウハイハがその石について尋ねたので、彼はその位置を教えてやった。すると、彼はウハイハによって砦から突き飛ばされ、落下して死んでしまった²⁾。

つぎに、宮殿建造の経緯をもう少し詳しく語っている例として、10世紀のイスバハーニー (897-c.972) を挙げる。彼は『歌の書』において、イブン・アル=カルビー (Ibn al-Kalbī) を引用しつつ、次のように述べている。

彼 [=ヌウマーン] がハワルナクを建てたのは次のような理由からであった。ヤズダジルド・ブン・サーブール (Yazdajird b. Sābūr) [「シャープールの息子ヤズデギルド」の意] は息子が育たないで [困って] いたため、疾病や疫病のない、爽やかで健康な滞在 (manzil marī' ṣaḥīḥ) について人に尋ねた。するとヒーラの郊外 (zahr al-Ḥīra) がよいと言われたので、息子のバハラーム・ジュール・ブン・ヤズダジルド (Bahrām Jūr b. Yazdajird) [「ヤズデギルドの息子バハラーム・ゴール」] をアラブの地 (arḍ al-'arab) における自分の代官 ('āmil) であったヌウマーン・ブン・アル=シャキールカのところへやった。そして、二人の住居としてハワルナクを建設し、息子と一緒にそこに居住し、アラブの沙漠 (bawādī al-'arab) へと彼を連れ出してやるよう、ヌウマーンに命じた。ハワルナクを建設したのはスィニンマールという男だったが、建設が終わると [人々が] その美しさ (ḥusn) と仕事の完成度 (itqān 'amali-hi) に驚嘆した ('ajibū) ので、このように述

い。本稿を「覚書」としたゆえんである。

2) al-Maydānī, *Majma' al-Amthāl*, ed. Muḥammad Abū al-Faḍl Ibrāhīm, 4 Vols., Cairo: 'Isā al-Bābī al-Ḥalabī wa-Shurakā-hu, 1977-79?, Vol. 1, p. 283. [] 内は引用者による補足 (以下同様)。

べた。「あなた方がきちんと賃金を支払ってくれ、私に対してふさわしいことをしてくれることがわかっていたら、太陽がどこを巡ろうがそれに合わせて回転する建物 (binā yadūr ma'ā al-shams haythu-mā dārat) にしたでしょうに」。そこで、人々は「お前はこれよりも素晴らしいものを建てることができながら、それをしなかったのだな」と言った。そして、命令によって彼は宮殿 (jawsaq) の頂上から投げ落とされて (ṭuriḥa) しまった。

〔イブン・アル＝カルビーは〕 こうも言う。ある伝承によると (fi ba'd al-riwāyāt)、スィニンマールは彼 [=ヌウマーン] にこう言った。「この宮殿 (qaṣr) には欠陥 (ʿayb) のある場所がございまして、そこが壊されると、宮殿全体が崩壊してしまう (tadāʿā) のでございまして」。すると、ヌウマーンが言った。「おお、神かけて (wa-Allāh)、その場所を誰にも教えてはならんぞ」。そして、スィニンマールは宮殿 (qaṣr) の頂上から投げられて (rumiya) しまった……(後略)³⁾

すなわち、舞台は5世紀はじめのメソポタミア地方。サーサーン朝ペルシアの皇帝ヤズデギルド1世 (在位399-420)⁴⁾ には跡継ぎとなるべき息子が生まれても、病没したりして、なかなか成人しなかったらしい。そこで彼はバハラームという名の息子——後に王位継承争いを経て父の跡を襲い、バハラーム5世 (在位420-438) となる⁵⁾——を、健康地だと聞いたヒーラ郊外 (もしくはクーファ郊外) で育てることにする⁶⁾。当時、そのヒーラを首都として周辺地域を支配していたのがサーサーン朝の属国的地位にあったアラブのラフム朝であり、その支配者がヌウマーン1世 (在位405-418) だった。宗主の命により、彼はバハラーム皇子を預かり養育するための宮殿として領内にハワルナクを建造することになる⁷⁾。ここで登場するのが建築家スィニンマールである。マイダーニーの『ことわざ集成』にあるように、通常、彼は「ルーミー (ギリシア人)」だとされている⁸⁾。しかし、ヤズデギルド、バハラーム、ヌウマーンらと異なり、一介の建築家に過ぎないスィニンマールには実在を裏づける証拠などなく、伝説的人物としておくほかない。他方、ハワルナクはジャーヒリーヤ時代からアラブ詩の中でたびたび言及される有名な建造物となり、近くにあったサディール (al-Sadīr) 宮殿と組み合わせて、いつしか「世界の30の驚異」の一つにも数えられるようになった⁹⁾。14

3) Abū al-Faraj al-Iṣbahānī, *Kitāb al-Aghānī*, ed. ʿAbd al-Sattār Aḥmad Farrāj, 25 Vols., Beirut: Dār al-Thaqāfa, 1955-64, Vol. 2, pp. 118-119.

4) 「罪人」(al-athīm) というあだ名で知られている。

5) バハラーム・「ゴール」(野生のロバ[の狩人]) というあだ名で知られる。ペルシアの文学や絵画の題材としてしばしば取り上げられる人物 (O. Klīma, “Bahrām V Gōr,” W. L. Hanaway, Jr., “Bahrām V Gōr in Persian Legend and Literature,” in Ehsan Yarshater ed., *Encyclopaedia Iranica*, London and New York: Routledge and Kegan Paul, 1982-, Vol. 3, pp. 518-519)。

6) ヒーラはイラク南部、ナジャフ (al-Najaf) の南東にあったユーフラテス河近くの都市。クーファはそのすぐ北東に位置する同河畔の都市。

7) ヌウマーンの在位年は、J. Spencer Trimingham, *Christianity among the Arabs in Pre-Islamic Times*, London and New York: Longman, 1979 に拠った。なお文献によっては、ハワルナクを建てたのはヌウマーンではなく、ラフム朝の別の王だったとしているものもある。

8) rūmī や min al-Rūm (ルーム出身) などの表現が使われている。ルームとは通常ビザンツ (人)、ギリシア正教徒などを指す。また文献によって、「ペルシア人」(min ahl Fāris) とされていることもある。さらに、「異国語の名」(ism aʿjamī) と曖昧に表現されていることもある。この aʿjamī はふつうペルシアを指すことが多いが、単に非アラブを指して使われることも多い。

9) L. Massignon, “al-Khawarnak,” in H. A. R. Gibb et al. eds., *The Encyclopaedia of Islam*, New ed. (EI²), Leiden: E. J. Brill, 1954-, 14-15世紀に活躍したマムルーク朝時代の歴史家マククリーズィーもその

世紀にモロッコ出身の大旅行家イブン・バットゥータ (Ibn Baṭṭūṭa, 1304-68/69 or 77) が立ち寄った際にはもはや廃墟と化していたようだ¹⁰⁾が、その声価はすでに伝説を通して確固としたものになっていた。スイニンマールの名はこのハウルナクと結び付けられて不朽のものとなったのである¹¹⁾。

ヌウマーンがスイニンマールを殺害した理由に関しては、右下にまとめた三つの説が挙げられている。マイダーニーは (1) と (2) を、イスバハーニーは (2) と (3) の説をそれぞれ紹介しているのである。文献によっては明確な理由を挙げていないものもあるが、多くの文献はこれらのうち、一つもしくは複数を挙げている。無論、細部における措辞の違いは見られるものの、パターンとしてはこの三つ以外にはない。ただし (2) に関しては、マイダーニーが述べているように、舞台がハウルナク宮殿ではなくウハイハの砦となり、サーサーン朝とは関係がないものもある。これについては、後ほど触れることにしたい。

- (1) 他人に似たような建物を建てさせないため。
- (2) 建物の一部を抜き取る、もしくは破壊すると、建物全体が崩壊してしまう。この秘密を他人に知られないように彼の口を封じた。
- (3) もっと素晴らしい——「太陽がどこを巡ろうがそれに合わせて回転する」——建物を造ることができたのに、それをしなかった。

2. 先行研究

スイニンマール伝説に関するモノグラフは、管見では三点ある。いずれも今から一世紀ほど前に発表されたものである。まず、ルネ・バセが「アルハンブラとハウルナ

『エジプト地誌』に、これらの「驚異」の一つとしてハウルナクを挙げている (al-Maqrīzī, *Kitāb al-Mawā'iz wa'l-Fitbār fī Dhikr al-Khiṭaṭ wa'l-Āthār*, ed. Gaston Wiet, 5 Vols., Frankfurt am Main: Institute for the History of Arabic-Islamic Science at the Johann Wolfgang Goethe University, 1995 [Reprint of the parts ed. Cairo 1911-1927], Tome I, pp. 131ff)。

10) *Voyages d'Ibn Batoutah: texte arabe, accompagné d'une traduction* par C. Defrémery et B. R. Sanguinetti, 4 Vols., Frankfurt am Main: Institute for the History of Arabic-Islamic Science at the Johann Wolfgang Goethe University, 1994 (Reprint of: Paris: Impr. nationale, 1874-1926), Tome II, p. 1. (邦訳: イブン・バットゥータ『大旅行記』イブン・ジュザイイ編、家島彦一訳注、全8巻、平凡社、1996-2002年、2巻、276頁。また351-352頁の訳注4も参照。) 1915年にハウルナクを訪れたオーストリアの東洋学者ムーズィルがその著書に掲載した図によれば、ハウルナクの遺構だと認識されたものは、40×70メートルあまりの大きさとなっている (Alois Musil, *The Middle Euphrates: A Topographical Itinerary*, New York: The American Geographical Society, 1927, p. 106)。ただし、常々その実在が疑問視されてきたサディールと併せてハウルナクの実在、もしくは伝説にあるようなその規模に関して疑問を持つ学者もいるようである (Jaroslav Stetkevich, *The Zephyrs of Najd: The Poetics of Nostalgia in the Classical Arabic Nasīb*, Chicago and London: The University of Chicago Press, 1993, pp. 71, 262 n. 39)。

11) アラブ文学に続いてペルシア文学でも、ハウルナクにまつわる伝説は取り上げられるようになった (Stetkevich, *The Zephyrs of Najd*, p. 68)。とりわけ有名な例として、ニザーミー (Nizāmī Ganjavī, 1141?-1209?) の『七人像 (七王妃物語)』(*Haft Paykar*) の冒頭に、スイニンマール伝説が取り入れられているのを挙げるができる (『七王妃物語』黒柳恒男訳、平凡社、1971年、6-10頁)。この物語におけるハウルナク建設の場面が、ペルシアの著名な画家ビフザード (Kamāl al-Dīn Bihzād, 1455?-1535/6)によって、一枚の写本絵画に仕上げられている (Robert Irwin, *Islamic Art*, London: Laurence King, 1997, p. 94)。また「スイニンマールの報酬」ということわざもペルシア語やトルコ語に入っている。

ク宮殿」(1891)と題する論文を発表し、後にそれが大幅に補筆されて「グラナダのアリハレスとハワルナク宮殿」(1906)となった¹²⁾。続いて、バセ論文に触発される形でJ.アレヴィが「ハワルナクとスィニンマール」(1907)を発表している¹³⁾。

バセの論文は、スペインに伝わる「ムーア風ロマンス」(romance moresque)の一つにスィニンマール伝説のモチーフが借用されていることを示したものである。スィニンマール伝説を伝える数多くの(主として)アラビア語文献を整理し、上に挙げたような建築家の殺害理由による異型の分類を行っている¹⁴⁾。また同時に、東欧・ロシアや西アフリカ、北アフリカなどに見られる類話も取り上げている¹⁵⁾。ただし、それらの類話がすべてスィニンマール伝説から派生したとは主張していない。傑作の唯一の所有者でありたいという欲求は普遍的なものであり、したがって、類話がそれぞれ独立に生じた可能性があることも認めている¹⁶⁾。

一方、アレヴィはハワルナクとスィニンマールという二つの、明らかに非アラビア語起源の固有名詞に着目し、そこから伝説の起源を探ろうと試みた。語源問題は、バセがあまり深入りしなかった問題であり、その限りで興味深い論考とは言える。しかし、導き出された結論(仮説)はかなり奇抜であり、そのまま信用するわけにはいかない。次のようなものである。

- 1) ハワルナク城を建てた建築家の名前スィニンマールは、エジプトの太陽神がセナムル(Senemur)王によってシリアのヘリオポリス [= 現レバノンのパールベック] に導入されたことについてマクロビウスが記す物語から借用されている。
- 2) ファトゥース(Faṭūs)と書かれる、いわゆるスィニンマールの息子の名¹⁷⁾は、セナムルによってシリアのヘリオポリスへと派遣されたエジプトの大僧正パルテメティ

12) René Basset, "L'Alhambra et le château de Khaouarnaq," *Revue des traditions populaires*, 6 (1891), pp. 459-465; "Les Alixares de Grenade et le château de Khaouarnaq," *Revue africaine*, 15 (1906), pp. 22-36. 本稿でバセの論文に言及するときは、後者を指す。

13) J. Halévy, "Khawarnak et Sinimmâr," *Revue semitique*, 15 (1907), pp. 101-107.

14) Basset, "Les Alixares de Grenade et le château de Khaouarnaq," pp. 35-36. ただし、バセは理由を述べていないものも含めて4型に分類。また、伝説の舞台がハワルナクかウハイハの砦かについても分類している。

15) *Ibid.*, pp. 28-31.

16) *Ibid.*, p. 30. バセはここで、大セネカ(前55頃-後40頃)がその仮想論争集に同様の考えを記していることを指摘している。エレア人にゼウスの彫像を制作するよう依頼されたアテナイの彫刻家フェイディアスが、像の完成後、金を盗んだと言われて両腕を切られる。「彼はゼウス像をとて素晴らしく仕上げたので、エレア人たちはそれが彼の最後の作品となるよう欲したのだ」という文章がアテナイ側の弁論に挙がっている。英訳: *The Elder Seneca, Declamations in Two Volumes: Controversiae, Suasoriae*, tr. M. Winterbottom, 2 Vols., Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press and London: William Heinemann Ltd., 1974, Vol. 2, p. 189 (Controversiae 8.2)。

17) イブン・アル=ファキーフ(Ibn al-Faqīh, fl. early 10th C.) その他の地理書などに出てくるファトゥース・ブン・スィニンマール(Faṭūs b. Sinimmār)。シャブディーズ(Shabḍīz)という駿馬が死んだとき、それにそっくりの生けるがごとき彫像造ったとされている(*Compendium libri Kitāb al-Boldān: auctore Ibn al-Fakīh al-Hamadhānī, quod edidit, indicibus et glossario instruxit M. J. de Goeje, 2. editio, Lugduni-Batavorum: E. J. Brill, 1967 [Photoreproduction: 1. ed. 1885], pp. 214-217*)。文献によってはカトゥース(Qaṭṭūs)やフトウルス(Fuṭrus)などとなっている場合もある。ちなみに、ドイツの小説家ハンス・ヘニー・ヤーンがイブン・アル=ファキーフによるファトゥースの逸話を短編作品に利用している(「サーサーン王朝の王者」『十三の不気味な物語』[原著: Hans Henny Jahnn, 13 nicht geheure Geschichten, Rowohlt, 1954] 種村季弘訳、白水社、1984、53-56頁)。

ス (Partemetis) の名が変化した結果である可能性が十分にある。

- 3) 太陽に合わせて回転する城を建設するというスニンマルに付与された能力は、弱められてはいるが、シリアの王宮における太陽の重要性が反映したものである。
- 4) 「ハワルナク」は「王に内在する太陽の光輝」(splendeur solaire inhérente aux rois) を意味する単純語 (mot simple) である。
- 5) 二つの地名、すなわちヘリオポリス (太陽の都) とハワルナク (太陽の光輝) のあいだにある意味の類似から、アラブの伝説は生まれた。
- 6) スニンマルの死はこの伝説の根底 (fond) には属していない。それはアラブ人が付け加えたものであり、何がしかの重要性をもつ建造物が強化され、持続するためには、人間の犠牲が必要だとする非常に流布した信仰から生じた可能性がある¹⁸⁾。

ローマ後期の著述家マクロビウス (Macrobius fl. around 400) が記す物語とは、『サトゥルナリア』(Saturnalia) 1巻23章10節に出てくるものである。アッシリア人がシリアのヘリオポリスで太陽神を崇拝しているが、その神像はセネムルがエジプトの王だったときにエジプトのヘリオポリスからもたらされた。それは、パルテメティスを長とするエジプトの僧侶らによって最初はアッシリアに送られ、しばらくして後に、そこからシリアのヘリオポリスへと移されたという¹⁹⁾。

先述のように、スニンマルは「ルーミー」とされていることが多い。しかし、アレヴィが留意したのは、スニンマルもしくはそれに近い名前がギリシア語(やラテン語)には見出しがたい事実である。アッシリア学者であれば、そこに Sin-immār、すなわち「スィン (月の神) は輝く」という大いにありうべきバビロニア風の名前を見出すことも可能であり、それだと母音の一致も完璧であるが、仮にメソポタミアの建築家なら西方出身の異邦人「ルーミー」ではなく、「ナバト (nabaṭ)」と呼ばれたであろう、とアレヴィは言う²⁰⁾。そこでマクロビウスの著作が持ち出されることになる。

アレヴィが主張するように、書承の逸話から口承の伝説が生まれること自体はよくあることだが、問題は、彼の推論そのものの強引さと論拠の希薄さであろう。そもそも、マクロビウスの話には建築家殺しのモチーフすら登場しないのである。アレヴィにしてみれば、着目点は固有名詞の起源や太陽の象徴のほうであるから、結論 6) にあるように、それは重要ではないとの立場かもしれない。しかし、伝説の起源について考える際に、核となるモチーフではなく、モチーフが纏っている衣装のみを重要視する態度には共感できない。ひとつの伝説が個々の要素に関して複数の起源をもっていたとしても何ら不思議ではないが、アレヴィは、中心的モチーフを無視した上で、周辺の要素のみに焦点を合わせて伝説の起源を語っているように見える。太陽に合わせて回転する建物が登場するのはスニンマル伝説の一パタ

18) Halévy, "Khawarnak et Sinimmâr," p. 107.

19) *Ibid.*, pp. 104-105; Macrobius, *The Saturnalia*, tr. Percival Vaughan Davies, New York and London: Columbia University Press, 1969, p. 151.

20) Halévy, "Khawarnak et Sinimmâr," p. 104. ナバトと呼ばれる人々には二種類あり、シリアのナバト (nabaṭ al-Shām) とイラクのナバト (nabaṭ al-ʿIrāq) がアラブによって区別されていた。シリアのナバトはアラブ起源であったが、イラクのナバトはアラム起源だったとされる (D. J. Graf and T. Fahd, "nabaṭ," in *EI*²).

ーンでしかないことさえ、あまり考慮されてはいないようである。

また、彼の議論の方向性を仮説的に受け入れたとしても、二つの伝説を結びつける根拠は依然として不十分であると言わねばならない。スィニンマールとセネムルの音的類似は決定的ではないし、パルテメティスの変形にいたっては牽強付会とされても仕方がないだろう²¹⁾。またセネムルが王であるのに対して、スィニンマールが王に殺される建築家であることを考えると、モチーフとの関係上、この仮説はさらに説得性を欠くように思う。

たしかに、「太陽に合わせて回転する」宮殿という言葉に敏感に反応したアレヴィの感性自体は評価されてしかるべきだろう。なぜなら、「より素晴らしい建物」の具体的なイメージとして、この表現はいかにも唐突であり、背後に何らかの文化的起源を考えなければ説明できないからである。しかし、太陽の象徴を重視するのであれば、ヘリオポリスと関連づけなくとも、サーサーン朝ペルシアにおける太陽の象徴の重要性や、ハワルナクという名前と太陽の光輝（ひいては王権）に関連性があることを示唆するだけで十分だったのではないか²²⁾。なるほど、スィニンマールには「ルーミー」という属性が与えられている。彼の名が「バビロニア風」であれば矛盾するように思われるし、かといってギリシア語で解釈するのも困難かもしれない²³⁾。しかし、ただちにセネムルなる名前との関連を示唆しても、他の点での無理が多すぎる。むしろ、一旦放棄された「スィンは輝く」という語源解釈のほう捨てがたい。アラビア語の辞書を見ると、スィニンマールの項には伝説の主人公の名に加えて、普通名詞として「月」「輝く月」などという意味が載っているからである²⁴⁾。確

21) Halévy, “Khawarnak et Sinimmār,” p. 105.

22) ハワルナクの語源については諸説あるが、私にはこれを議論する能力がない。ともあれ、アレヴィが主張するように、ペルシア語起源である可能性が高いことでは大方の意見が一致している。ただし、ペルシア語源説にも色々ある。とりあえず、以下の文献を参照。L. Massignon, “al-Khawarnak,” in *EL*²; Stetkevich, *The Zephyrs of Najd*, pp. 71, 262 n. 41; Michael Zwettler, “Imra’al Qays, Son of ‘Amr: King of ...??,” Mustansir Mir ed., *Literary Heritage of Classical Islam: Arabic and Islamic Studies in Honor of James A. Bellamy*, Princeton, New Jersey: The Darwin Press, 1993, p. 26 n. 44; *The History of al-Ṭabari: An Annotated Translation*, Vol. 5, The Sāsānids, the Byzantines, the Lakhmids, and Yemen, translated and annotated by C. E. Bosworth, Albany: State University of New York, 1999, p. 75 n. 200. このうち、Zwettler は “proto-Neopersian” **xāvarānak/q*, “The Little West” すなわち「西」の縮小辞ではないかという説を唱えている。なお、アレヴィや Stetkevich が述べている “khvarne” や “hvarna” については、伊藤義教「仏光とイラン要素」『ゾロアスター研究』岩波書店、1979、361-409頁や井本英一「Av. *xvarānah*-について」『オリエント』17-2 (1975)、75-86頁を参照。

23) ただし、ライスケ (Reiske) やラスムセン (Rasmussen) のように、スィマーン (Simān=シモン Simon) が変化したと考える学者もいる (Basset, “Les Alixares de Grenade et le château de Khaouarnaq,” p. 24 n. 2)。

24) そのほか、「夜眠らない男」「泥棒」などの意味がある (Ibn Manẓūr, *Lisān al-‘Arab*, Cairo: Dār al-Ma‘ārif, 6 Vols., n.d., s.v. “Sinimmār”)。なお、中世アラビア語辞典の最高峰の一つとされる同辞典には、Kurāṣ の説として、“Sinimmār” という名詞の形態が “fini‘lāl” であり、これはアラビア語ではなく、ギリシア語 (rūmi) の形態であるという見解が紹介されている。その根拠は、アラビア語文法学の権威スィーバワイヒ (Sibawayhi, d. c. 796) が、“sifirjāl” という形をアラビア語 (al-kalām) にはないものとしていることによる。これ自体は事実だが、実はスィーバワイヒは「スィニンマール」という言葉を “fi‘illāl” という別の (アラビア語の) 形態に分類している (ただし、この部分は幾つかの写本では抜け落ちているようである) ので、Kurāṣ の説は成り立たないように思われる (Sibawayhi, *al-Kitāb: Kitāb Sibawayhi*, ed. ‘Abd al-Salām Muḥammad Hārūn, 5 Vols., Cairo: Maktabat al-Khānjī, Vol. 4 [2nd ed., 1982], pp. 295, 327)。

実なことは何も言えないが、当時の中東における神話的シンボル体系を考えても、月と太陽の組み合わせには興味深いものがある。他方、「ルーミー」という属性は、中東地域においてギリシア人やローマ人が受けていた建築家としての高い評価を背景として付与された可能性も考えられなくはない²⁵⁾。あるいは、ルーミーが真実で、スィニンマールはあだ名だった可能性もある。

以上、バセとアレヴィによる研究の骨子と、後者の仮説に対する疑問を述べた。次に、バセも言及している、他の地域に見つかる類話の問題を取り上げる。

3. 他地域の類話

既述のごとく、バセがスペインに伝わるムーア風ロマンスを扱っているが、これは彼が主張するようにスィニンマール伝説がそのまま流れ込んだものだろう。しかし、彼は他にも中東以外の地域に流布する類話を紹介している。ロシアのイヴァン3世がリヴォニアに砦を築いたとき (1492年)、似たような建物を建てられないようにポーランド人建築家の両目を潰した話。イヴァン4世がモスクワに有名なヴァシーリー大聖堂を建てたとき、イタリア人建築家の両目を潰した、もしくはもっと美しい建物を造ることができるといった建築家の首を刎ねた話。モロッコの建築家がセグー (Ségou 現マリ共和国の一部) の王ビトン・クリバリ (18世紀) のために宮殿を建てるが、同様に美しい宮殿を別の君主に建てられないよう、王に殺される話²⁶⁾。エディルネ (アドリアノーブル) にモスクを建てたギリシア人建築家が、スルタンの命によってミナレットの上から自作の羽をつけて飛翔させられ、墓のあいだに墜落して死ぬ話などである。その他の類話も紹介されているが、カピリアの伝説を除き、おおむねヨーロッパや東欧・ロシアあたりが舞台になっている。

実のところ、類話はもっと広範囲に分布している。第一の手がかりとして、スティス・トンプソンによる『民間文芸モチーフ索引』から、関連するモチーフを右に抜き出す²⁷⁾。

スィニンマール伝説にもっとも適

S161.0.1. *Masons who build mausoleum of princess lose their right hands so they may never again construct so fine a building.* (Cf. S165.7, W181.2.) India: Thompson-Balys.

S165.7. *Artisan who has built palace blinded so he cannot build another like it.* (Cf. S161.0.1, W181.2.) Buddhist myth: Malalasekera I 489, 672.

W154.21. *Workers (builder) killed when secret building or grave is finished.* (Cf. W181.2.) Krappe "Les funérailles d'Alaric" *Annuaire de l'institut de philologie et d'histoire orientales et slaves* VII (1939-44) 229ff.

W181.2. *King kills architect after completion of great building, so that he may never again build one so great.* (Cf. S161.0.1, W154.21.) Wesselski *Theorie* 15; Ireland, England: Baughman.

25) *The History of al-Ṭabarī: An annotated Translation*, Volume 5, p. 75 n. 201. イスラム時代になっても、事情は変わらず、たとえばイブン・ハルドゥーン (Ibn Khaldūn, 1332-1406) はウマイヤ朝でもビザンツから建築関係の職人たちを招請したことを述べている (イブン・ハルドゥーン『歴史序説』森本公誠訳 (全4巻)、岩波文庫、2001年、第3巻、74頁)。

26) これも、モロッコ経由でスィニンマール伝説が伝わった可能性がある。

27) Stith Thompson, *Motif-Index of Folk-Literature: A Classification of Narrative Elements in Folktales, Ballads, Myths, Fables, Mediaeval Romances, Exempla, Fabliaux, Jest-Books, and Local Legends*, revised and enlarged ed., 6 Vols., Bloomington and London: Indiana University Press (second printing), 1966.

合するのは、W181.2.である。事実、このモチーフ索引に基づくシャーミーの『アラブ世界の民間伝承』²⁸⁾において、スイニンマール伝説はこの項目に分類されている。また、最初の二つも分類記号こそ異なるが、スイニンマール伝説の類話として扱うことができる。建物が権力者のために造られるという点は共通している。違いは、建築に従事した人物が殺されるのではなく、傷つけられるところにある。バセが紹介している類話の一部がこれにあたる。W154.21.は、スイニンマール伝説のパターン(2)に近い。

いずれにせよ、ここに紹介されている文献やさらにそれらが挙げる参考文献を辿っていくと、このタイプの伝説はかなり広範囲に分布していることがわかる²⁹⁾。たとえば、ポーマンはW181.2.の項目に、アイルランドやイギリスに関する文献を五つ挙げている³⁰⁾。その中には有名なジェイコブズの『イギリス民話集』(続編)に収められた「ゴボン・シーア」(Gobborn Seer)も含まれている³¹⁾。より重要なのはクルックの論文「徒弟の柱: 建築家とその弟子」である³²⁾。題名は、自分より優れた弟子を見て親方が自殺してしまう、あるいは弟子を殺してしまう、という話から取られている。ギリシア神話にあるダイダロスとその甥タロスの物語がその原型的な例である。しかし実際には、別のモチーフ、すなわちスイニンマール伝説型の類話の紹介に、より多くの紙幅が割かれている³³⁾。そこでは、アイルランドや北ドイツ、そしてスイニンマール伝説そのものに加えて、インドの例も紹介されている³⁴⁾。とりわけ、著者の専門領域であるインドの例は数も多く、詳しく紹介されている。また他の文献を見ても、インドはこの種の伝説が多様かつ広範囲に分布している地域であるように思われる。パターンとしては、同様の、もしくはもっと素晴らしい建物を造ることができないように、王が建築家の身体を傷つける——とくに腕を切り落とす——ものが多い³⁵⁾。さらに、これらの類話は文献上でもかなり古いものにまで遡ることができる。たとえば、古代インドで生まれた仏陀

28) Hasan M. El-Shamy, *Folk Traditions of the Arab World: A Guide to Motif Classification*, 2 Vols., Bloomington and Indianapolis: Indiana University Press, 1995.

29) ただし、それらの文献は極めて広範囲にわたるため、すべてを見ることができたわけではない。さらなる類話の収集は今後の課題と言える。

30) Ernest W. Baughman, *Type and Motif-Index to the Folktales of England and North America*, the Hague, The Netherlands: Mouton & Co., 1966.

31) Joseph Jacobs, *English Fairy Tales and More English Fairy Tales*, ed. and Introd. Donald Haase, Includes complete original illustrations by John D. Batten, Santa Barbara, California; Denver, Colorado; Oxford, England: ABC CLIO, 2002, pp. 230-233. この話では、たしかにこのモチーフが用いられているが、実際には棟梁親子は息子の妻の計略により、殺されずにすむ。邦訳: 河野一郎編訳『イギリス民話集』岩波文庫、1991、58-63頁など。

32) W. Crooke, "Prentice Pillars: the Architect and His Pupil," *Folk-lore*, 29 (1918), pp. 219-225.

33) 著者によると、この二つはある一つの物語 (a tale) の二つの形式 (two forms) だという (p. 219)。トンプソンも「弟子殺し」を同じ「嫉妬」の下位項目 (W181.2.1.) に分類しているが、ここでは違いが大きいと考える。

34) スイニンマール伝説に関する著者の情報源はニコルソンの『アラブ文学史』である (R. A. Nicholson, *Literary History of the Arabs*, Richmond: Curzon Press, 1993 [repr. of the 1930 ed.], p. 40).

35) タージマハールについても、いくつか類話が存在している(たとえば、渡辺健夫『タージ・マハール物語』朝日選書、1988、6-7頁)。また、隣国ネパールにあるムスタン王国にも類話があるらしい (Carsten Nebel, "Gemi-Tsarang-Lo Manthang," *Mustang*, 1998, [http://www.mymhimalayas.com/mustang/3.htm])。

の前世物語集『ジャータカ』にすでに次のようなくだりがある。

これは、師がバグガのスンスマラ山の近くのペーサカラー林に滞在しておられたとき、ボーディ王子について語られたものである。ボーディ王子というのはウデーナの息子であって、当時スンスマラ山に住んでいた。王子はある技術の優れた大工を召して、ほかの諸王にも並ぶものがないようなコーカナダ (紅蓮) という名の宮殿を造らせた。宮殿ができると王子は、「この大工は、ほかの王にもこのような宮殿を造ってやるかもしれない」という妬みの心を起こし、大工の眼を抉 (えぐ) りとらせてしまった³⁶⁾。

殺すのではなく、目を潰すという違いはあるが、スイニンマール伝説のパターン (1) とよく似ている。しかも、スイニンマール伝説より古いことは明らかなので、スイニンマール伝説をこの種の伝説の起源とすることには根拠がないことをバセよりも明確に主張しうる。また、バセが言うように、類話が独立して生じた可能性は否定できないにせよ、インド起源の可能性もやはり考えておくべきかもしれない。

4. 現代アラブ世界の類話

目をアラブ世界に戻してみても、比較的新しい建造物に関して類話が見つかることは興味深い。まず、カイロのスルタン・ハサン学院 (Madrasat al-Sulṭān Ḥasan) にまつわる伝説を取り上げよう。この学院 (兼モスク) は、マムルーク朝時代の建築を代表する傑作として名高く、その質素かつ重厚壮大な外観から「要塞」にたとえられることも多い、骨太な宗教建造物である。1356年にバフリー・マムルーク朝のスルタン、アル＝ナースィル・ハサン (al-Nāṣir Ḥasan 在位1347-51、1354-61) によって建設が始められたが、完成する前にハサン自身は暗殺されている。この建物について、イギリスの東洋学者スタンレー・レイン＝プール (1854-1931) が『カイロ物語』(1902) にこう書いている。

スルタンはその傑作にすっかり魅せられてしまい、建築家の腕 (the architect's hand) を切り落としてしまった。腕がなくなれば、建築家はせっかくの才能を用いることができず、このような傑作を仕上げることは二度とできなくなるだろうという漠然とした考えからであった³⁷⁾。

建築家は殺されず、手を切り落とされるのみであるところがスイニンマール伝説とは異なっているものの、危害を加える理由はパターン (1) ということになる。ただし、レイン＝プールがこのような伝説をどこから持ち出してきたのかは定かでない。彼のほかの著作では、この伝説への言及はなく、彼がこの伝説の根拠を自分で確かめたのかどうかも判然としない。このような点を指摘して、現代エジプトを代表する小説家の一人で、エジプト中世史に題材をとった作品を数多く発表しているガマール・アル＝ギータ

36) 中村元監修・補注『ジャータカ全集』(全10巻、春秋社、1982-91年)、4巻 (松村恒・松田慎也訳)、164頁 (第353話)。George Peiris Malalasekera, *Dictionary of Pali Proper Names*, 2 Vols., London: John Murray, 1937, pp. 489, 672 参照。同書によると、『ダンマパダ・アッタカター』(*Dhammapada aṭṭhakathā*) にも類話が見られる。

37) Stanley Lane-Poole, *The Story of Cairo*, London: J. M. Dent, 1902, p. 228.

ーニー (1945-) は「だが、私はこの時代の史料のなかにそのような出来事を確認するいかなる記述をも見出すことはできなかった」と述べ、レイン=プールはスイニンマール伝説に影響されたのではないかと推測している³⁸⁾。しかし、すでに見たようにスイニンマール伝説では、建築家は例外なく殺されることになっている。もし、レイン=プールが直接スイニンマール伝説をスルタン・ハサン学院に当てはめたのなら、ここでも建築家は殺されることになっていたほうが自然だろう。それを考えれば、この逸話の直接の起源は別の類話に求められるべきであるように思われる。

そもそも、レイン=プール以前にもこの伝説を紹介している書物はある。たとえば、かつて世界中の旅行者に愛されたベデカーのガイドブックがそれである。1885年に発行された『エジプト——旅行者のための手引書』の第一巻 (第2版) に、こう記されている。

伝説によると、スルタン・ハサンは作品の完成後、建築家の両手 (hands) を切り落とすよう命じた。同じように見事な建物をほかに建てられないようにするためである。(ヨーロッパ各地に伝わる似たような伝説 (myths) では、建築家は同じ理由から目をつぶされたことになっている)³⁹⁾。

これはレイン=プールの紹介よりもかなり早い。ただし書物の性格上、やはり何の典拠も挙げられていない。残念ながら、私は今のところ、こうした伝説が流布していたことを示す当時のアラビア語文献を知らない。ベデカーもしくは彼の協力者がそのような口碑を実際に聞いたのか、そうであったとして、それがどのくらい広まっていたのか、あるいは何か別の書物に拠ったのかは不明である。

いずれにせよ、おそらくは、これらエジプト案内書の影響力もあって、この伝説は以後多くの (外国語による) 書物に登場するようになった。たとえば、ダグラス・スレイデンも『東洋のカイロ』(1911) のなかでこの伝説を紹介しているが、「まえがき」で重要参考文献としてレイン=プールの『カイロ物語』に言及している。彼の場合、同じ話はアラブ圏のいろいろな傑作についても語られている、と付け加えているが、それ以上は述べていない⁴⁰⁾。

また、この話は戦前にカイロを訪れた日本人旅行者によっても紹介されている。作家の野上弥生子 (1885-1985) は1938 (昭和13) 年の秋、渡欧途上でカイロに立ち寄ったときのことを『欧米の旅』(1942-3) という紀行文のなかに書いたが、そのなか

38) Jamāl al-Ghīṭānī, *Qāhiriyyāt Mamlūkiyya*, Cairo: Dār al-Maʿārif, n.d., p. 24.

39) K. Baedeker ed., *Egypt: Handbook for Travellers, Part First: Lower Egypt, with the Fayūm and the Peninsula of Sinai*, 2nd ed., revised and augmented, Leipzig: Karl Baedeker, London: Dulau and Co., 1885, p. 260. 第1版は未見。このガイドブックは改版ごとにかなり修正が加えられており、第3版 (1895) 以降、この伝説は削除されている。なお、もう一つの有名ガイドブックであるトマス・クック (Thomas Cook) では、少なくとも第2版 (1906) および第3版 (1911) には、この伝説が記載されている (A. Wallis Budge, *Cook's Handbook for Egypt and the Sūdān*, 2nd ed., London: Thos. Cook and Son, Ludgate Circus, E.C. Simpkin, Marshall, Hamilton, Kent and Co., Ltd., 1906, p. 453; 3rd ed., *Cook's Handbook for Egypt and the Egyptian Sūdān*, 1911, p. 447)。これも第1版は未見。

40) Douglas Sladen, *Oriental Cairo: The City of the "Arabian Nights,"* London: Hurst and Blackett, Ltd., 1911, p. 170. そのほか、エジプト人によるものとしてはたとえば、Mohamed Aboudi, *Aboudi's Guide Book: To the Antiquities of Egypt Historically Treated with Many Illustrations, Map of the Nile and Plans of the Principal Temples of Upper Egypt*, Cairo: Costa Tsoumas & Co., 1954, p. 37.

で彼女はこの伝説を次のように紹介している。

ハサン王はこの美しい寺院を二つ拵へさせないため、棟梁の右の腕を切断させたと云ふ。この巷説は王が亡くなつてから二年もたつて漸く出来あがつた事実で打ち消されることながら、同時にこの寺院の見事さを証拠立ててゐる⁴¹⁾。

さらに彼女は、スルタン・ハサン学院だけでなく、その東隣りにあるシタデル——サラディン (サラフッディーン、1138-93) が礎を築いた城塞——についても、「十二世紀の頃、サラディン広場の名に残るサラディン王が、ギゼのピラミッドから奪つた石で築いたもので、出来あがると金は支払はないで使つた奴隷を悉く斬り殺した」という伝説を紹介している (腕を切断されるのではなく殺されるところがスルタン・ハサン学院の伝説と異なっており、殺される理由が賃金を払わないで済むようにという部分がスィニンマール伝説にはないパターンとなっている)⁴²⁾。しかし、やはり伝説の出所については何も記していない。現地のガイドや日本人から聞き及んだ可能性もあるが、少なくともスルタン・ハサン学院の伝説に関しては、書物から得た知識である可能性が高いように思われる。既述の如く、すでに英語による様々なエジプト案内が出ており、野上彌生子がそれらを読んでいた可能性は高いし、それだけでなく、彼女がエジプトを訪問した頃には日本語の書物でもいくつかこの伝説を紹介しているものがあつたからである。

たとえば、無教会伝道者として知られる黒崎幸吉 (1886-1970) の『パレスチナの面影』(1925) や建築史家である天沼俊一 (1876-1947) の『埃及紀行』(1927) に同じ話が紹介されている⁴³⁾。また日本郵船が作成し、エジプトに立ち寄る日本人旅行者に無料で配布していた日本初のエジプト観光案内書『埃及見物』(1925) にも、この伝説は簡単に紹介されているので、これから伝説を知った日本人旅行者も大勢いたことだろう⁴⁴⁾。野上の記述はベデカーや天沼の記述に近いように思われるが、黒崎や天沼も先行の旅行案内書に拠つたのではないだろうか。

ところで、カイロ近郊の街、ヘリオポリス (アラビア語名 Miṣr al-Jadīda =「新カイロ」) に「男爵 (バロン) の宮殿 (Qaṣr al-Bārūn)」と呼ばれる奇怪な建物があるが、この建物に関しても同じような伝説が流布している。男爵というのは、ベルギー出身の実業家エドワール・アンパン男爵 (Edouard Empain, 1852-1929) のことで、ヘリオポリスの街は彼によって生み出された。エジプトがイギリスによる植民地支配を受けていた20世紀の初頭、カイロの中心から北東へ約10キロメートル離れた沙漠のなかに築かれたエジプト初の近代型郊外都市である。その名はもちろん、近辺にあ

41) 『野上彌生子全集』(全23巻、別巻3巻) 岩波書店、1980-82年、第16巻、96頁。

42) 同書、98頁。なお、両伝説は彼女の日記にも記されている。『野上彌生子全集』(第II期、全29巻) 岩波書店、1986-91年、第6巻、67-68頁。

43) 黒崎幸吉『パレスチナの面影』向山堂書房、1925年、277頁；天沼俊一『埃及紀行』岩波書店、1927年、7-8頁。後者の初出は『建築と社會』の連載 (1923年7月-1925年3月)。

44) 日本郵船株式会社編『埃及見物』日本郵船株式会社、1925年、10頁。この案内書自体、ベデカーやクック等の旅行案内を大いに参照したことが「編者の告白」に記されている。なお、この案内書については、青木澄夫「大正時代のアフリカ旅行情報——『埃及見物』と『世界通』」(日本人のアフリカ「発見」3)、『月刊アフリカ』、Vol.37 No.9(1997)、30-33頁を参照。

った古代都市の名にちなんでいる。そして1911年、アンパン男爵のエジプトにおける住居として同市に完成した広大な邸宅が「男爵の宮殿」である。設計を担当したのは、1900年のパリ万博でその東洋趣味を発揮した建築家アレクサンドル・マルセル (Alexandre Marcel, 1860-1928) である。彼によって造られた「宮殿」は、パゴダをそなえた巨大なヒンドゥー寺院風の外観をもち、外部に様々な彫像・彫刻を施したもので、周囲の風景から完全に浮き上がった異様な建物であった。1950年代には、アンパン男爵の子孫の手を離れて別の人物に所有権が移り、その後、空き家のまま放置された結果、建物全体——とりわけ内部——が痛んだ「幽霊屋敷」のまま現在にいたっている⁴⁵⁾。最近では、悪魔崇拝者 (‘Abadat al-Shayṭān) と呼ばれる若者たちがオカルト的儀式にこの建物を使っていたというニュースも流れ、そのグロテスクなイメージをよりいっそう強めた。

「宮殿」にこのような歴史があるのなら、それが数多くの伝説めいた噂話を生んだとしても不思議ではない。1999年1月に私自身がヘリオポリスに住むエジプト人男性 (29歳) から聞いたところによると、男爵はこれほど素晴らしい建物を誰も建てることのできないように、建築家の腕を切り落としてしまったという逸話があるらしい。スルタン・ハサン学院の伝説と同じパターンである。だが、この建物に関して面白いのは、それだけでなく、明らかにスイニンマール伝説に属する別のパターンが適用されている点であろう。Heba Fatteen Bizzari は次のように述べている。

びっくりしたことに、あるガイドはとても真剣に次のようなことを私に語った。その古い宮殿は建物全体を回転させるある種の回転扉〔回転盤?〕(turnstile) の上に建てられ、それゆえ窓はいつも太陽のほうを向くようになっていた、と。もちろん、それはカイロの都市伝説だったが、長年にわたり、ヘリオポリスにあるこの建物はあらゆる種類の作り話、伝説、噂話によって土地の人々の想像力に火をつけてきた⁴⁶⁾。

同じ話は、最近の旅行案内書にも紹介されているので、これはある程度流布している話だと思われる⁴⁷⁾。私が聞いた話とは異なり、建築家に対する言及はないが、奇妙なことに、太陽に合わせて回転する宮殿のモチーフだけが残っている。このような逸話がいつから語られるようになったのかはわからない。だが、スイニンマール伝説を知っている者が、いかにもそうした伝説にふさわしいこの建造物にそれを当てはめたであろうことはほぼ疑いがない。沙漠的環境、また古代エジプトにおける太陽神信仰の中心地「ヘリオポリス (太陽の都)」の名をもつ街に建てられた「宮殿」であることを

45) 「男爵の宮殿」に関しては、以下を参照。Mercedes Volait and Claudine Piaton, “L’identification d’un ensemble urbain du XXème siècle en Egypte : Héliopolis, Le Caire,” [http://www.culture.gouv.fr/culture/revue-inv/insitu3/d2/text/d2.pdf]. Samir Raafat, “Who Built the Palace...Count Dracula or Baron Empain?,” [http://www.cgy.com/landmarks/97-05-01.shtml].

46) Heba Fatteen Bizzari, “The Baron’s Palace: Fables, Legends and Controversies,” [http://www.toureygypt.net/featurestories/baronspalace.htm].

47) 「ヒンドゥー寺院に似たアンパン男爵の宮殿には、当初、回転式の塔があり、それによって主人は一日中太陽を追うことができた」(Dan Richardson and Karen O’Brien with additional accounts by Shirley Eber, Daniel Jacobs, Simon Jordan, Omar Khutab and David Lodge, *Egypt: the Rough Guide*, 2nd ed., London: Rough Guides, 1993, p.150)。

考えると、まことに的を射た適用例というほかない (本稿で疑問を呈したアレヴィの仮説さえ想起させる)。それにもかかわらず、上記出典中にスィニンマール伝説に対する言及がない点は興味深い。現代において古典的伝説がその起源を忘却されつつ、人々のあいだに再び流布していくさまが見て取れるように思われるからである⁴⁸⁾。

次にモロッコに目を転じれば、そこにもスィニンマール伝説が適用されたとおぼしき例が見つかる。マグリブ地域でもっとも美しい門の一つと言われるメクネスのマンスール門が舞台となっている。伝説によると、門の建設を命じたアラウィー朝のスルタン、ムーレイ・イスマール (Mawlāy Ismā'il, 1672-1727) は、キリスト教からイスラムへ改宗したアル=マンスール (al-Manṣūr) がこの壮麗な門を完成させたとき、それよりもっと素晴らしいものができるかどうか尋ねた。建築家が肯定の返事をする、イスマールはその場で彼を処刑したという⁴⁹⁾。

このように、この種の伝説はアラブ世界において現在も語られている。そのなかには、スィニンマール伝説がその舞台装置を変えながらしぶとく生き残って (あるいは復活して) いるとはっきりわかる例もある。本節で用いた資料の多くが旅行案内書やインターネット・サイトであることには理由がある。一つには、この種の伝説は学術的にほとんど扱われていないからである。また、歴史的建造物と結び付いた形で展開されるこうした伝説は観光という現象と密接につながっており、それによって増幅・拡散される傾向があるからである。一方、このような話が現地の人々のあいだに口碑としてどこまで広まっているかについては、詳細不明とせざるをえない。

5. スィニンマール伝説における三つのパターン

網羅的とは言えないが、私の知る範囲の類話を一通り整理したところで、再びスィニンマール伝説そのものに立ち戻ってみたい。

前述のように、建築家が殺される理由をめぐる三つのパターンが用意されている。スィニンマール伝説をすべて一つに括った場合、それは本稿の冒頭に挙げたような最大公約数的な要素をもとにしているわけだが、三つのパターンの背後にある思考はそれぞれに異なっている。再度、トンプソンの分類番号を見てみよう。**S**は「異常な残忍さ (Unnatural Cruelty)」に与えられた記号であり、そのなかで **S160** 番台は「身体損傷 (Mutilation)」にあてられている。**W**は「性格特性 (Traits of Character)」に割り振られた記号であり、**W150** 番台~**190** 番台は「好ましからざる性格特性—社会的 (Unfavorable Traits of Character—Social)」、そのなかで **W154** は「忘恩 (Ingratitude)」、**W181** は「嫉妬 (Jealousy)」にあてられている。

この基準もまた、分類作業一般につきまとう曖昧さと無縁ではないが、それでもある程度、スィニンマール伝説の性格を考える際に役立つ。ヌウマーン王が素晴らしい

48) ただしもちろん、私が聞いた例においては、建築家の腕が切り落とされる点がスィニンマール伝説と異なり、この点に関しては、別系統の——たとえばスルタン・ハサン学院のような——伝説からの影響が紛れ込んでいる可能性はある。

49) Mark Ellingham and Shaun McVeigh, *The Rough Guide to Morocco*, London and New York: Routledge and Kegan Paul, 1985, p. 122. 実際には、スルタン・ハサン学院と同じように、この建造物が施主の生前に完成することはなかった。

建物を独占したいという欲望は、他人がそうした建物を所有することに対する「嫉妬」の裏返しである。そうした欲望から、スイニンマールに対してなす行為が「忘恩」であり、その具体的行為が殺人（一部の類話で「身体損傷」）ということになる。

ただし、これがうまく当てはまるのは先に述べたパターン (1) だけである。パターン (2)、すなわち建物の秘密云々は単純に嫉妬には分類できない。これは一般的にはむしろ、秘密を漏らす恐れがある者の「口を封じる」行為と言ったほうがよい。王の墳墓や居城を建設する作業に関わった建築家や職人が、建物の秘密を守るために殺されるという逸話はしばしば見受けられる⁵⁰⁾。また太陽に合わせて回転する宮殿というパターン (3) も、解釈によっては、嫉妬に分類するのは困難である。多くの場合、「もっと素晴らしい建物」をほかの人に建てられないようにというのではなく、それができる能力がありながらやらなかった、との一句が挿入されている。たしかに潜在的には、他人がもっと豪華な建物を所有する可能性があり、それに対して嫉妬していると言えなくもない⁵¹⁾。しかし、より直接的には、建築家の不誠実に対する罰（復讐）という解釈が前面に出てきているように見える。また、(2) と (3) の背景には共通して、「口は災いの門」という考えも潜んでいるように思われる。

もちろん、各パターンの起源を歴史的に辿っていくのは史料的にも不可能に近い。ただ、手元にある材料の範囲内で考えた場合、注目すべき要素の一つとして、マイダーニーが述べているウハイハという人物が挙げられる。

ウハイハはヤスリブ (Yathrib、後のメディナ al-Madīna) の人で、生没年は不詳。しかし、一説では彼の死後、その妻がアブド・マナーフの息子ハシム (Hāshim b. ‘Abd Manāf) と再婚し、預言者ムハンマドの祖父アブド・アル＝ムッタリブ (‘Abd al-Muṭṭalib) を生んだことになっているので、おおよその年代を推定することはできる⁵²⁾。いずれ

50) 始皇帝陵に関して、初山明『秦の始皇帝——多元世界の統一者』白帝社、1994、254頁。西ゴート王アラリックの墓に関して、Alexander H. Krappe, “Les Funérailles d’Alaric,” *Annuaire de l’Institut de philologie et d’histoire orientales et slaves*, 7 (1939–44), pp. 229–240. 日本の城に関しては、渡辺豊和『芸能としての建築』晶文社、1983、第一章「渡職人考」11–49頁。フランスの作家ガストン・ルルー (Gaston Leroux, 1868–1927) の小説『オペラ座の怪人』(*Le Fantôme de l’Opéra*, 1910) でも、怪人エリックの前半生が語られるエピローグにおいて、このパターンがパターン (1) と組み合わせられる形で利用されている (『オペラ座の怪人』三輪秀彦訳、東京創元社、1987、459–461頁)。また、ウィリアム・フォークナーらが脚本を書いたハワード・ホークス監督の映画『ピラミッド』(*Land of the Pharaohs*, 1955) でも、最終的には建築家は助かるのだが、同様のプロットが使われている (この映画に関しては千葉大学の栗田禎子先生に御教示いただいた)。建築家に限らず、単に仕事を任せた部下・協力者の口を封じる話であれば、いたるところにある。

51) 実際、まれにパターン (3) と、他人が素晴らしい建物を所有することに対する嫉妬が組み合わせられていることもある (たとえば、al-Suhayli, *Kitāb al-Rawḍ al-Unuḍfī Tafsīr Mā Ishṭamala ‘alay-hi Ḥadīth al-Sira al-Nabawiyya li-Ibn Hishām*, 2 Vols. in 1, Cairo: Maṭba‘at al-Jamāliyya, 1914, Vol. 1, p. 67)。ニザーミーの『七人像 (七王妃物語)』でも、もっと素晴らしい建物を造ることができるという建築家の言葉を聞いて、彼が他人にそのような建物を造ってやるかもしれないと王が嫉妬心をおこし、彼を殺したことになる (『七王妃物語』黒柳恒男訳、9頁)。ただし、そこでは太陽に合わせて回転する宮殿というイメージは出てこない。

52) ウハイハに関しては次の文献を参照。Taieb el-Achèche, “Uḥayḥa b. al-Djūlāḥ,” *El?*; Khayr al-Dīn al-Zirikli, *Qāmūs Tarājim li-Ashḥar al-Rijāl wa’l-Nisā’ min al-‘Arab wa’l-Musta‘ribin wa’l-Mustashriqīn*, 8 Vols., 7th ed., Beirut: Dār al-‘Ilm li’l-Malāyīn, 1986, Vol. 1, p. 277. 次の文献にも校訂者の解説がある。al-Jāhīz, *al-Bukḥalā’*, ed. Tāhā al-Ḥājirī, Cairo: Dār al-Ma‘ārif, 2nd. ed., n.d., pp. 390–391.

にしても、ヌウマーンやバハラムの時代と重なることはなく、彼らよりも半世紀から一世紀は後の人物であろう。アウス族の長で詩人であったが、吝嗇家で高利貸しもしていたという。イスバハーニーの『歌の書』はスィニンマール伝説とは関係のない箇所、この人物に関する次のような逸話を伝えている。

人々はつぎのように言っている。それ〔ダハヤーン(al-Dahyān) という名の砦 (uṭum)] を建てたとき、彼〔ウハイハ〕は自分の奴隷 (ghulām) とともにそこに登った (ashrafa)。そして、こう言った。「頑丈な砦 (ḥiṣn) を建ててやったぞ。今までどんなアラブの男もこれほど堅固で見事なものを建てたことはない。だが、一つ石があって、それを引っこ抜くと (nuzi'a)〔建物〕全体が崩れ落ちてしまう、その石のありかを俺は知っているのだ」。すると、奴隷が言った。「私も知っております」。そこで、ウハイハが「それなら見せてみる、息子よ (yā bunayya)」と言う。「これがそうです」と奴隷は言って、顔をそちらに向けて示した。彼が石のありかを知ってしまったことを見てとると、ウハイハは砦の上から彼を突き落とした (dafa'a-hu min ra's al-uṭum)。それで彼は頭から落ちて死んでしまった⁵³⁾。

ここで殺されるのは砦の建築に従事した者ではなく、たまたま主人の所有物の秘密を知ってしまった名もなき奴隷である。それに対して、スィニンマール伝説では、『ことわざ集成』にあるように、奴隷は建築家であり、彼のほうから秘密の石のありかを主人に教えている。これをどう解釈したらよいだろうか。さまざまなアラビア語文献を調べてみると、次のようなことがわかる。そもそも、ウハイハはハワルナクとは関係がなく、当然ではあるが、スィニンマール伝説にウハイハが登場する場合、建物には「宮殿」(qaṣr, jawsaq)ではなく、常に「砦」(uṭum)という言葉が使われている。スィニンマールは彼の奴隷 (ghulām) だったとされていることが多い。また、そこではスィニンマール殺害の理由として、常に (2)、すなわち「秘密の石」のパターンが挙げられており、ほかのパターンは見られない。その一方で、『歌の書』ではウハイハ版の話にスィニンマールという名前は出てこず、ただ「奴隷」とだけ記されている。

こうしたことからすると、次のような可能性も考えられる。すなわち、スィニンマール伝説とは別にウハイハとその奴隷にまつわる伝説が生じ、それが前者に吸収された結果、後者から前者にパターン (2) が持ち込まれた可能性である。スィニンマールは建築家なので、その名をもつようになった奴隷も建築に従事したことになり、主人よりも先に石の秘密を知っている人物となるように内容が変換された。またそれと併行して、ウハイハの伝説という起源が忘れられる過程も進行し、やがてこのパターンが完全にスィニンマール伝説に融合するケースが生まれた。そこでは、舞台はダハヤーン砦からハワルナク宮殿へ移り、ウハイハの名や「奴隷」という言葉も消えた。その一例が、冒頭に挙げたイスバハーニーによるスィニンマール伝説の記述に含まれている。このように推測することもできるのではないだろうか。

(1) と (3) のパターンに関しては、それらのうちどちらが古いかという問題を解き明かすのは難しい⁵⁴⁾。ただ一つ言えることは、パターン (3) はハワルナクに結び

53) al-Iṣbahānī, *Kitāb al-Aghānī*, Vol. 15, p. 40.

54) パターン (1) は、類話のところで紹介したように、かなり一般的で流布範囲が広く、文献的にも古くまで遡ることができる (ただし、建築家は殺されるのではなく、傷つけられることが

ついたオリジナルの伝説であろうということである。アレヴィが注目したように——ただし、必ずしもヘリオポリスと結びつける必要はないと思われるが——、背後にペルシア文化圏もしくは当時の中東に広く行き渡っていた太陽信仰と何らかの関係をもつ可能性は強い。ハウルナクという名称が「太陽」と強く結びついているとすれば、「太陽に合わせて回転する」宮殿はハウルナクを舞台とするにふさわしい。当然ながら、ウハイハが登場する話では、このパターンは見られない。

ただし、スィニンマール伝説の発祥とサーサーン朝皇帝ヤズデギルドの事情は本来関係がなかったと思われる。ハウルナクがバハラームのために建設されたという話自体、後からの思いつきだとネルデケは述べている⁵⁵⁾。たしかに、伝説の前置きにあたるペルシア側の事情は、伝説の枠組みを提供しているだけで、内容においては何の役割も果たしていない。それどころか、内容的な矛盾が現れている場合すらある。異型の紹介意義も含めて、イブン・アル=ファキーフ (Ibn al-Faḡīh [fl. early 10th century])による『諸国誌抄』(*Mukhtaṣar Kitāb al-Buldān*)の一節を引用する。

(前略)……それ〔ハウルナク〕を建設したのは、ヌウマーン・ブン・イムル・アル=カイスであった。彼はアブー・ラビーア・ブン・ズフル・ブン・シャイバーンの娘のシャキークの息子で、ハリーマ〔馬の名〕の騎手 (fāris Ḥalīma) である。彼は80年間にわたって王位にあり、ハウルナクを60年かかって建てた。彼のためにそれを建設したのはスィニンマールというギリシア人の男 (rajul rūmī) である。二、三年建築に従事しては、五年間姿を消し、探しても見つからないのだが、やがてまたやってきては同じように建築に従事し、とうとう60年が過ぎたときハウルナク〔の建設〕を終えた。そこで、ヌウマーンは自分の駄獣 (dābba) に跨ってそれ〔ハウルナク〕に登った。前面にある大河 (baḥr) と背面の陸地を眺めやり、魚 (ḥūt) やトカゲ、それにガゼルや鳥、駝鳥 (ḡalīm)、ナツメヤシの樹々、農地などが目に入ったので、彼は「このような建物は今まで見たことがない」と言った。そこで、スィニンマールが彼に向かってこう言った。「ある焼き煉瓦 (ājurra) がありまして、それが取り除かれます (zāla) と、この宮殿 (qaṣr) 全体が消えてなくなる (zāla) のでございます」。すると、ヌウマーンが「そち以外に誰かそれを知るものがおるのか」と彼に尋ねたので、スィニンマールは「いいえ」と答えた。そこで、ヌウマーンは「必ずや、誰にも知られないようにせねばなるまい」と言い、〔部下の者に〕命じたので、スィニンマールは宮殿の上から投げ落とされ (quḍhifa)、ばらばらになっ〔て死んでしまっ〕た (taqaṭṭa'a) ……(後略)⁵⁶⁾

ヌウマーンが80年も王位についていること自体ありえないが、何よりも、建築に60年もかかっていたのでは、バハラームの養育を目的とした宮殿建設とは齟齬をきたすことになる⁵⁷⁾。無論、大建造物の建設は増築過程を含めて長年月を要するもので、建

多い)。スィニンマール伝説として、どちらが元の型かという問題とは必ずしも関係がないが、フォークロアとしては——もちろん (3) から太陽云々の要素を除くとしても——(1)の方がより普遍的で原初的な型に属すると言えるかもしれない。

55) *Geschichte der Perser und Araber zur Zeit der Sasaniden aus der arabischen Chronik des Tabari, übersetzt und mit ausführlichen Erläuterungen und Ergänzungen* Verschn von Th. Nöldeke, Graz: Akademische Druck-u. Verlagsanstalt, 1973 (Rep. of 1879 ed. of Leiden: E. J. Brill), p. 79 n. 3.

56) *Compendium libri Kitāb al-Boldān*, pp. 176-177.

57) 宮殿建造にかかった期間を20年とするものもある。Abū Maṣṣūr al-Thaʿālībī, *Thimār al-Qulūb fī al-Muḍāf wa'l-Mansūb*, ed. Muḥammad Abū al-Faḡl Ibrāhīm, Cairo: Dār al-Maʿārif, 1985?, p. 139.

物全体が完成する前から一部が使われ始めることもある。しかし、たとえそう解釈するとしても、バハラム養育のためという枠組みと物語内容の親和性はあまり感じられない。以上を考慮すると、スィニンマール伝説の枠組みとしてのバハラム養育話は、後になって伝説に付け足されたと見たほうがよいように思われる。

6. おわりに

類話も含め、この種の伝説は、建築家とそのパトロンである権力者の関係一般について考えさせる。壮麗な建築、とりわけ高層建築は権力の象徴としてこの上ない効果を発揮する。古来より、様々な地域で権力者たちは競ってそのような建造物を建ててきた。宗教的なシンボリズムに基づいた建築によって自らの権威を高めようとした場合も多かっただろう。しかし、スィニンマール伝説に関して言えば、そのような宗教色は薄い。この伝説においては権力者は単に世俗的な富・権力の象徴として宮殿や砦を建造しているように見える（前節で述べたように、サーサーン朝皇帝による命令という枠組みは後から付け加えられた可能性が強く、この際捨象して差し支えないだろう）。建物は外から眺めて賞賛されるのでも、内部の壮麗さを賞賛されるのでもなく、そこに登り、高所から下界を見下ろす王の視線とともに賞賛される。イブン・アル＝ファキーフが記す例を見てもわかるように、そこでは現世的な富を所有する喜びが強調されている。彼自身が神のようであり、すべてを所有すると同時に、他者の運命を意のままに支配する。これは、絶対者としての権力者のイメージにほかならない。そして建築家は、そのような権力者の富を利用してはじめて自らの能力を存分に世に示すことができる。その点で、名のある建築家はもともと権力と離れていることが難しい存在だと言えよう。そこには常に、二つの両極端な報酬が用意されている。パトロンの意に応えることができたなら、最高の報酬を得るが、それに失敗すれば、報酬どころか自分の身さえ危うくなる。だが、たとえ成功した場合でも、建築家の前にはなお新たな危険が待ち受けている。彼にすれば、最良の作品は常に未来の可能性として取っておかねばならないが、権力者にとってはまさにその可能性こそ自らの権威を脅かすものとなる。ここに建築家の不幸が生まれる余地がある。権力者と建築家の、このような切っても切れない関係を巡って生まれた伝説の一つが、スィニンマール伝説ということになるだろう。

しかし、それで終わりではない。スィニンマール伝説とその類話には、もう一つ考えなければならない要素が残っている。それは、建築家の異人性である。スィニンマールはふつう「ルーミー」であり、ときに「アアジャミー（非アラブ人）」や「ペルシア人」であるが、いずれにせよ異邦人であることに変わりはない。いくつかの書物に引用されている詩によれば、王は彼を宮殿の上から投げ落とすとき、「その異人 (al-ʿilj) を放り投げろ」と言ったことになっている⁵⁸⁾。この ʿilj という言葉は、メクネスの門を造ったと言われる建築家マンスールを形容する添え名でもあり、門は今でも「異人マンスールの門 (Bāb al-Manṣūr al-ʿIlj)」と呼ばれている⁵⁹⁾。スルタン・ハサン学院を造った建築家

58) 一例を挙げれば、*Compendium libri Kitāb al-Boldān*, p. 177。

59) “ʿilj” という言葉は、アラビア語の辞書では、ふつう「野生のロバ」や「(異民族の) 異教徒 (kāfir; kuffār

も、真偽はともかくエジプト人ではないと思われていたようである⁶⁰⁾。「男爵の宮殿」もヨーロッパ人建築家によって建てられた。そのほか、バセが紹介している他の地域の類話(本稿第4節参照)でもやはり、多くは異国からやってきた建築家であることが明言されている。とすると、これは一種の異人殺しであり、そこに異人に対する民衆の想像力・空想力のあらわれを見て取ることもできるのではないか。

元来、高名な建築家はその職業上の要請によって、定住からはかけ離れた存在だった。彼は渡り職人として、たとえ異国であろうと、自らの技量を発揮できるところへと赴いた。そして、現地人から見れば異人として、自らが持ち込んだ、現地にはない様式の建物を造った。スィニンマール伝説において語られる「アラブが見たこともないような異国風の建物 (*bunyān ‘ajamī lam tara al-‘arab mithla-hu*)」という表現には、そうした現地人の視線が反映されている⁶¹⁾。建築作業の途中で一時的に行方不明になることをどう解釈するかは難しい問題だが、ここにも彼の異人性が現れているとは言える。ある者は、建物がしっかりと固まるように期間を置いたと述べているが⁶²⁾、想像を逞しくすれば、ほかの仕事へ行っていたとも、故郷へ帰っていたとも考えられる。あるいは、作品の完成が自分にもたらすかもしれない災いを先へ引き延ばしていたのかもしれない。そして、かつて日本の城大工が口封じのために命を狙われたり、人柱にされたりしたと言われるのと同じように⁶³⁾、今や消息のわからなくなった傑作の造り手には、様々な伝説がつむぎだされていっただろう。彼が異人だったために、恐ろしくて暗い、もしくは悲劇的なイメージが増幅されたのかもしれない。あるいは、そうしたイメージゆえに、建築家が異人として設定されたのかもしれない。

いずれにせよ、このようなモチーフが相当に強い生命力をもっていることは、これまで述べてきたとおりである。本稿で述べえなかったことの一つに、スィニンマール伝説のモチーフが現代のアラブ文学に活用されているのかどうかという問題があるが、これについては今後の課題としたい⁶⁴⁾。

最後に、スィニンマール伝説の舞台となったハワルナク宮殿にまつわるもう一つの有名な逸話を取り上げておこう。

al-‘ajam)」などを意味するとされる (Ibn Manẓūr, *Lisān al-‘Arab*, s.v. “‘ajl”). ボズワースによれば、この言葉はもともと「粗野な、たくましい」というようなニュアンスを持っていたらしいが、アラブによって拒絶的な調子で非アラブ、特にイラクのアラム語話者やペルシア人を指す語として使われるようになったという (*The History of al-Ṭabarī: An Annotated Translation*, Vol. 5, p. 78 n.210).

60) たとえば、ベデカーのガイドブック第3版 (1895) ではギリシア人、第7版 (1914) や第8版 (1929) ではシリア人とされている。

61) al-Suhaylī, *Kitāb al-Rawḍ al-Unuf*, p. 67. また、カズウィーニー (Zakariyyā’ b. Muḥammad al-Qazwīnī, c.1203-83) の『諸国の旧跡と人々の情報』には、「誰もそんなふうに建てることはできない驚くべきやり方で (‘alā waḍ‘ ‘ajīb) 建てていた」という表現もある (*Āthār al-Bilād wa-Akhbār al-‘Ibād*, Beirut: Dār Ṣādir, n.d., p. 186).

62) al-Tha‘ālībī, *Thimār al-Qulūb fī al-Muḍāf wa’l-Mansūb*, p. 139.

63) 渡辺豊和、前掲書。人柱といえば、アレヴィが結論 (6) において、そのような考え方を示唆していたことが思い起こされるが、類話においては建築家が殺されるのではなく身体が傷つけられるだけのことも多いので、そうした例には適用できないことになる (Crooke, “Prentice Pillars,” p. 224).

64) チュニジアの Mansour M’Henni がフランス語で『スィニンマールの報酬』(*La récompense de Sinimmar*, Tunis: Éd. Sahar, c.1997) を発表しているようだが、未見であり、単なる再話か創作か不明。

ある日、彼〔ヌウマーン〕はハワルナクの自室に座し、そこから西にナジャフとその周囲に広がる庭園やナツメヤシの木々、果樹園、水の流れを、そして東にユーフラテス河を見下ろした。それは、ある春の日の出来事であり、そこはナジャフの丘の上だった。彼は目に入る緑と花々 (nawr) [nūr と読めば「光」] と水の流れに感嘆の声を上げ、付き添っている宰相にこう尋ねた。「そちはこれほどの景色を今までに見たことがあるか？」すると、宰相は答えた。「いいえ。しかし、それが永遠につづくものでしたら」と。王は言う。「では、いったい何が永遠につづくのだ？」宰相が答える。「来世において神 (Allāh) の御許にあるものでございます」。王はなおも訊く。「で、それはどうすれば手に入るのじゃ？」宰相答えて曰く、「上様が世 (al-Dunyā) をお捨てになり、神を崇め、その御許にあるものを乞い求めることによってでありましょう」。このような次第で、彼はその夜のうちに王権を捨て、粗衣 (al-musūh) をまとい、誰にも気づかれずに、こっそりと〔宮殿を〕抜け出した。朝になっても、人々は彼に何が起きたか知る由もなかったのも、門前へとやって来た。しかし、いつものように許可をもらって王にまみえることはできなかった。許しが出るのがあまりにも遅いので、人々は王について聞き出そうとしたが、もう彼は見つからなかった⁶⁵⁾。

タバリー (al-Ṭabarī, 839-923) の歴史書『使徒と王の歴史』(*Tārīkh al-Rusul wa'l-Mulūk*) から引用した。ヤークート (Yāqūt, 1179/80-1229) の『地名辞典』(*Muḥjam al-Buldān*) では、「数日間、人々は事情をよく飲み込めなかったが、やがてヌウマーンが王位を捨て、山中や荒野 (al-falawāt) で世捨て人の生活 (al-nusk) に入ったことが明らかになった。その後、彼の姿を見かけた者はいない。宰相も彼に付き随い、ともに去っていったという」との一節が加わっている⁶⁶⁾。

要するに、ヌウマーン王が漂泊の世捨て人となる経緯が語られた遁世譚である。彼は、地上の栄華を極めたその瞬間に、宰相の一言によってそうした栄華のはかなさを悟り、王権を含めて持てるものすべてを捨て去り、荒野へと姿を消す。これはヌウマーンに関する最も有名な伝説であろう。実際、ヌウマーンのあだ名の一つが「漂泊者 (al-sā'iḥ)」なのである。ラフム朝の領内にはネストリウス派のキリスト教徒が多く見られ、歴代の王の中にもキリスト教徒になった者がいた。ヌウマーン自身、もとはキリスト教徒を迫害したこともあったが、後にキリスト教会の建設を支援したり、一説ではキリスト教聖者として有名なシリアの柱頭行者シメオン (Symeōn ho Stylitēs, c390-459) に (夢のなかで) 会ったともいう⁶⁷⁾。アラブの伝説では、彼自身キリスト教徒になったともされる⁶⁸⁾。こうしたキリスト教的環境を考えると、イスラム以前のアラブ世界を舞台とするこの伝説に後世の禁欲主義的な価値観がどれほど投影されているかはわからないにしても、とりあえずはもっともらしい話と受け取ることもできよう。

ともあれ、ヌウマーン王にまつわるこの伝説はスィニンマール伝説と並べたときに、

65) *Annales: quos scripsit Abu Djafar Mohammed ibn Djarir At-Tabari*, cum aliis edidit M. J. de Goeje, 16 Vols., Leiden: E. J. Brill, 1964-1965, Prima Series 2, p. 853.

66) *Jaqt's geographisches Wörterbuch*, herausgegeben von Ferdinand Wustenfeld, 6 Vols., Frankfurt a.M.: Institute for the History of Arabic-Islamic Science of the Johann Wolfgang Goethe University, 1994 (Repr. of Leipzig ed., 1866-1873), Vol. 2, p. 492.

67) Trimmingham, *Christianity among the Arabs in Pre-Islamic Times*, pp. 188-190; *The History of al-Ṭabarī: An annotated Translation*, Volume 5, p. 81 n. 217.

68) Nicholson, *Literary History of the Arabs*, p. 41.

より一層その印象を強くする。スイニンマール伝説は、ハウルナクに形象化された現世の虚飾に対する人間の執着を浮き彫りにする話でもある。そのような背景を踏まえてこの遁世譚に接すれば、ヌウマーン王の変貌ぶりがさらに際立つことになるだろう。

[謝 辞]：本稿は関西アラブ研究会第12回研究報告会（2003年12月20日／於四天王寺国際仏教大学）における発表「建築家の受難——スイニンマール伝説に関する若干の覚え書き」、および日本中東学会第20回年次大会（2004年5月9日／於明治大学）における発表“Ba‘d al-Malhūzāt ‘alā Qiṣṣat al-Bannā’ al-Manhūs: Sinimmār”を再構成し、それに加筆を施したものである。両発表の場で様々な論評を寄せてくださった方々に感謝したい。

[付 表]：本来、主なアラビア語文献におけるスイニンマール伝説の型を一覧表にして掲げ、文献間の引用・参照・系列関係を分析すべきであるが、紙幅の都合上難しいので、興味深い以下の三例を挙げるにとどめる（al-Khalīl b. Aḥmad の *Kitāb al-‘Ayn* は最初期の著作の例として挙げた）。

- (A) al-Khalīl b. Aḥmad, Abū ‘Abd al-Raḥmān (c.718-c.791), *Kitāb al-‘Ayn*, ed. Maḥdī al-Makḥzūmī and Ibrāhīm al-Sāmarrā’ī, 8 Vols., Beirut: Mu‘assasat al-A‘lamī, 1988, Vol. 7, p. 343.
- (B) Ibn Ḥabīb al-Baghdādī, Muḥammad (d. 860), *al-Munammaq fī Akhbār Quraysh*, ed. Khūrshīd Aḥmad Fāriq, Beirut: ‘Ālam al-Kutub, 1985, pp. 277-278.
- (C) al-Nuwayrī, Shihāb al-Dīn Aḥmad b. ‘Abd al-Wahhāb (1279-1332), *Nihāyat al-Arab fī Funūn al-Adab*, 18 Vols., Cairo: Wizārat al-Thaqāfa wa’l-Irshād al-Qawmī, al-Mu‘assasa al-Miṣriyya al-‘Āmma li’l-Ta’līf wa’l-Tarjama wa’l-Ṭibā’a wa’l-Nashr, n.d. (Reprint of Cairo: Dār al-Kutub ed.), Vol. 1, pp. 385-387.

文 献	パターン（殺害理由）	建 造 物	施 主	建 築 家
(A)	秘密の石	砦 (uṭum)	ウハイハ	スイニンマール*
(B)	_____	al-Qādisiyya 宮殿 あるいは al-‘Udhayb 宮殿	ペルシア王 (kīsrā)	スイニンマール**
	_____	Taymā’ の Shanīf と Mārid	‘Ādiyā’ al-Yahūdī	
	_____	Wāqīm という砦 (uṭum)	Ḥuḍayr al-Katā’ib	
	秘密の石	ダハヤーン砦 (uṭum)	ウハイハ	
(C)	太陽に合わせて 回転する建物	ハウルナク	Dhū al-Qarnayn al-Lakhmī ***	スイニンマール (という名の男)
	似たものを 建てさせないため	ハウルナク	ヌウマーン	
	太陽に合わせて 回転する建物			
	秘密の石 ****			

* 砦の建築を〔生業に〕していた男。

** ペルシア人 min ahl Fāris とギリシア人 min al-Rūm とも。

*** al-Mundhīr b. Mā’ al-Samā’ を指す（筆者注）。

**** 正当な賃金をやらなければ、その石を引き抜きそうだから。